用瀬町江波集落再生プロジェクト事業報告書（概要）

１　目的と概要

江波集落は町内で一番奥地にあり、昭和３０年代には５５世帯・３２７人の規模の大きな集落であったが、少子高齢化が進み、現在では３０世帯・６０人、高齢化率も６０％を超えており、このままでは集落の存続も危ぶまれる状況となっている。数年前から本市の輝く中山間地域創出モデル事業を活用し、集落の活性化や伝統文化の伝承または特産品の開発等に取組んで来たものの、集落のリーダーや後継者の問題、住民の高齢化などにより、継続した取り組みが困難となっている。

こうした中で、新たな地域資源の創造、またはその活用方法の研究、増加しつつある空き家の活用、県指定無形民族文化財「江波三番叟」の継承などをテーマに、若年層にとっての地域の魅力の有無を明らかにするとともに、若年層の移住による人口と集落維持の可能性を検討することを目的とする。

２　実施方法

地域外出身者が多く本県との関わりが薄い環境大学生が、江波集落に「地域の楽しみ」の存在の有無を調査するとともに、自らが楽しむ案を示す中で、集落居住者や行政担当者との意見交換を通じて具体的な提案を行う。

地域の楽しみ方を実現するにふさわしい自然条件、施設要件、まちなみ、景観について、本集落を含め複数個所実地に調査確認する中で、特定集落の相対的評価及び基準を明らかにする。

３　調査結果

若年層の集落移住に関する総括としては、学生の学業、就業の観点から推量すれば、２０歳代の若年層が江波集落へ移住する可能性は少なく、むしろ若年層の人生設計、将来を考慮すれば、集落移転に躊躇を覚えざるを得ない。

現状において、集落が志向すべきは、集落内外との人的関係の接点を形成していくことがまず求められる。同時に集落外の若年層を惹きつけることができる魅力を持つことも求められる。

調査結果は、集落と学生との一時的関係形成の可能性があることを示すのみである。集落居住者と地域の行政担当者において、集落の将来図を設定し、その負担をどこまで負うかを議論することがまず基本的前提となり、そこに今回の調査結果を生かすことが出来れば有用な活用となる。

◆　集落の楽しみ方の可能性

【県を対象とした楽しみ方】自然を楽しむ・地域の歴史を楽しむ・文化を楽しむ
（キャンプ・スキー・マリンレジャー・自転車・空中散歩・星空観察等）

【学生による集落調査】現地調査と集落居住者及び行政担当者との意見交換
（学生が楽しむことが可能な要素が存在するか、どんな楽しみ方があるか等）

【集落への来訪促進】渓流利用の釣り場整備・宿泊施設の整備、季節の景観を利用したイベントの実施

【自ら楽しむ場の提案】夏、冬の余暇活用施設・田舎暮らし体験・自然の中を歩く・農業体験等

【居住促進と経営的実践】シェアハウスの建築・イベント開催による集客

【江波集落における楽しみ】シカ肉料理の実践・ｷｬﾝﾌﾟｱｳﾄﾄﾞｱ体験の実践・ｻｲｸﾘﾝｸﾞやﾂｰﾘﾝｸﾞの実践等

４　今後の取組

今後も江波集落と定期的に協議する場を持つとともに、引き続き環境大学の協力も得ながら本調査結果を基にして具体的な取組みを検討していく。